長洲町立長洲小学校　校長便り　№54

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和4年12月2日(金)

12月に入り、時間が過ぎるのをとても早く感じている。師走とはよく言ったもので、つい廊下を走ってしまう。そんな時は深呼吸だ。落ち着こう！

今年度もコロナ禍の影響で、多くの行事に影響が出た。しかしながら、保護者の皆様、子ども達の協力の下、多くの場面で課題を解決することができた。更に、コロナ禍においても多くの行事を実施することができた。今後も、どうすれば実施できるかという視点で、多くの行事を実施していきたいものだ。

年末を迎えて慌ただしくあるものの、1年を振り返るための精神的に温かい時間を過ごしている自分がいる。今年も多くの方々に感謝の気持ちで一杯だ。

働き方雑感

「すぐやる人」と「すぐやれない人」の違いは何かと考えた。私はどちらかといえば「すぐやれない人」だ。しかし、自分を「すぐやる人」に変えなければ働き方改革に繋がっていかない。最近思う。「すぐやる人」はメリハリの付け方が素晴らしい。積極的にオンとオフを設定しているように思う。そういえば自分もそうだったが「やれない人」は常に仕事のことばかり考えていて、あれもこれも気になり、時間の使い方が分散してしまって、実利が上がらない状態だ。朝から晩まで、仕事が頭から離れず、ただそこにいるだけの状態が続き、慢性化している。逆に「すぐやる人」はオンとオフの違いがはっきりしている。仕事から離れると、趣味であったり家族との時間であったり、有意義且つ仕事に活きる時間を過ごしているように思う。

働き方改革が叫ばれるようになってかなり時間がたったが、いつも思うことは意識改革だと思う。「そうは言っても…」とか「でもですねぇ…」とか言っていてもダメだ。積極的に仕事をしないことも働き方改革には必要である。

子供達が生きる未来社会⑤

「896／1800」この数字から何を表しているのでしょう？

今後10年から40年の間に、20歳から39歳の若年女性の人口の減少率が5割を超える自治体を「消滅可能性都市」とし、さらに、総人口が1万人未満になる自治体について「消滅可能性が高い」と定義されているのですが、それによると、若い女性の人口が半分以下に減少する市区町村は全体（約1800）の5割にあたる896におよび、うち人口1万人未満になる523の自治体は、実際に消滅してもおかしくない危機にあるということなのです。現在1800程ある地方自治体のうち、半分程が消滅する可能性がある…長洲町はどうなのでしょうか。それは今後の行政や教育等々、超スマート社会（Society5.0）を意識した社会の仕組みの構築、新しい雇用の創生、未来社会に対応できる人材の育成等にかかっていると言って良いでしょう。

私が今何となく感じている大切だと思うことは、今後人と物とがインターネットで繋がる時代が来るということによって、地球上の何処にいようが、都会だろうが田舎だろうが、そういうことは関係なく、問題なのはそこにいる人がどのような活動を展開していくかです。

目の前の現実にどのようなアプローチをして、どのような新しい価値を産み出していくか、それは人にしか考えられないことであり、人が為すべき責務だと思います。

シリーズ「自分を語る」#54

前回から続きます。この「落ち」はナイトハイク当日に起こりました。玉名でのナイトハイクの移動はJRを利用していましたので、集合はJR玉名駅でした。集合時刻の30分前からほぼ全員集まっていましたが、彼だけがいません。連絡もありません。どうしたのでしょう…。職員有志に手伝ってもらって、彼の家に迎えに行きました。ここでの詳しい状況を書くと少々表現が荒っぽくなりますので、控えます。この時お母さんは私にこう言いました。「先生、この行事には絶対に参加してもらいたいんです。だから、先生、引きずってでも連れて行ってください。」と。私は困ってしまいました。でも、お母さんの切なる願いだったようで、涙を流しながらお願いされ、実際に引きずって集合場所へ移動しました。移動する車の中でなぜ遅れたのか聞いてみると小さな声で、「見たいテレビがあるから…」私は心の中でコケました。「なぁ～にぃ～！」という気持ちでしたが、冷静さをキープしてこう言いました。「じゃあ、みんなの前で理由を伝え、お詫びをしなさい。」元気に「はい！」と返事をする彼でした。ウソだろホントに言うの…。まさかのまさかです。彼は集合場所でみんなの前に立ち

「ぼくは見たいテレビがあるので、ナイトハイクに行けなくなりました。」

他の子ども達は「ポカ～ン…」と、開いた口が塞がらない、何が起こっているのか解らない状態でした。ここで説得して引きずって42、195㎞歩く自信はないので、仕方なく彼を家に返し、1名だけ不参加での出発でした。

行事そのものはスムーズに進み、事故やケガもなく終了しましたが、彼のことが気になりながら夏休みを過ごしました。

2学期の始業式の日、彼は学校を休みました。その理由はこうでした。「ナイトハイクに行かなかったので、先生に怒られる。」また心の中でコケた私は、今学期の目標を「彼を毎日学校へ引きずってでも登校させる。」としました。その日は諦めましたが、次の日も同じ理由で欠席しようとしたため、私は学年主任に授業をお願いし彼のもとへ向かいました。母親とも連絡を密に取っていましたので、ことはスムーズに進みました。まさか私が毎日迎えに来るとは思わなかったらしく、3日間彼を引きずった結果、彼はとうとう学校に来るようになりました。当然、不登校状態ではありません。「なぜ、登校しようと思ったのか？」と聞くと、こうでした。「先生に引きずられると痛いから。」私はまたまた心の中でコケました。しかし、ここから卒業まで、彼はほとんど休まず登校することになりました。

平成10年度の夏休み以降は、特に大きな事件もなく過ぎていきました。玉名町小3年目ということで、名前は結構知られていて、行事を楽しみにしている子ども達や保護者がいるとの情報もありました。有り難いことです。私は楽しいだけの行事なのに、それを楽しみにしてくれる人がいると思うと、力も湧いてきます。

（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）